令和元（２０１９）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No. 27（R元. 11. 21発行）文責 校長 福田雅也

同じ体験をした私たちだから…

「おとうさんはヒーロー」
お父さんは消防団に入っていて、地震の後は家に帰ってこられません。「ぼく」は家の片付けをしながら、帰ってこない父に不満を感じていました。
二か月が経って、ようやく家で過ごせるようになった父。「地震の時はどうしていたの？」と尋ねると、父は「つぶれた家から命がけでおじいさんを助けたこと」「昼は壊れた家の片付けや、避難所の世話をしていたこと」「夜は留守宅の見回りをしていたこと」などを話しました。「あきひとが家のことを頑張っているから、お父さんも消防団の仕事を頑張れたんだよ」と話す父。また、母からも「お父さんは電話でずっと心配していたのよ」と聞かされた「ぼく」。
これまでの自分を振り返り、「そんな自分でよかったのかな」と考え始めます。
「お父さんは、ぼくのヒーローだ」。そして、自分から進んで茶碗を洗い始めます・・・。

これは、道徳の授業で本年度から使用している、熊本県教育委員会が発行した「平成２８年熊本地震関連教材『つなぐ』～熊本の明日へ～」の小学校3・4年生用に掲載されている「お父さんはヒーロー」という教材文のあらすじです。
本校の佐藤先生が、活用事例報告のためにこの教材を使って4年生で授業をしました。学習を深めるため事前に保護者の方々へアンケートをとらせていただいた関係で、授業後に保護者の方々への文書を発行しました。その一部が下の枠内の文章です。

道徳アンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました！　もう熊本地震から、3年以上経つのですね…。
今回、『つなぐ～熊本の明日へ～』の授業に取り組むことになり、真っ先に浮かんだのが、一緒に地震を乗り越えてきた、4年生10名の顔でした。
あの年の4月に、私は高木小に赴任しました。赴任してちょうど2週間、子どもたちが入学してから3日。突然の地震でした。校区のことも、子どもたちの家も、まだ全然分かりません。周りの先生たちにも助けられ、全員無事であることを確認し、ホッとしたことを覚えています。…そして、本震。
2度の地震で、高木小も、校区も、皆さんの家も、大きな被害を受けました。余震が続き、地鳴りに怯え、命の危険すら感じました。また、ライフラインが寸断され、みんなが、生きていくことに必死の毎日でした。（中　略）
さて、今回の授業で、おうちの方に、当時のことを書いていただきました。本当にありがとうございました。（中　略）
あの状況で、幼い子どもを抱え、「命を守るため」に神経をすり減らし、「生きるため」にがむしゃらに過ごしたご家族の方々の苦労…。アンケートに書かれた言葉を読みながら、本当に他人事ではなく、涙が出そうでした。私も自宅が被災し、住むところを探したり、水くみに行ったり、車中泊をしたりと、今となっては、あの時は必死だったなあと振り返ることもできますが、皆さんと同じように、大変な日々を過ごしていたからです。
そんな中、学校で、子どもたちが明るく、元気に過ごしていたのは、本当に「救い」でした。「何とか、外で遊ばせてやりたいなあ」「友だちと思い切り遊ばせてやりたいなあ」と思いながらも叶わない状況で心苦しかったのですが、教室ではいつも笑顔でいてくれて、こちらがかえって励まされていました。
地震から3年が経ち、少しずつ「復興」し、道路は元通りになり、新しい家も増えました。でも、ここまで来るのに、たくさんの時間と多くの方の苦労がありました。
高木小で一緒に過ごした子どもたちには、ここまでの道のりを決して忘れずに、いつまでも心に留めておいてほしいと願っています。
そして、何よりも、いちばん身近で、何よりも大切に守ってくれた「家族」の気持ち…いつまでも忘れないで、自分の「根っこ」に持ち続けてくれると信じています。

この文章を読みながら、当時は一緒に生活していなかった私まで胸が熱くなりました。この学校便りで詳しく触れることはできませんが、アンケートや学習後の感想等で子どもたちとお家の方々がお互いの気持ちを確認し合い、道徳としての学習も深まりました。この状況こそが、この教材で学習する意味だと感じます。お家の方々、子どもたち、そして指導する教師が、同じ体験をし、乗り越えてきたからこそ共有し合い、確認し合うことができるのだと思うのです。

同じ体験をした私たち熊本、上益城、御船の子どもたちと教師は、保護者の方々のご協力もいただきながら、今後もこの教材を使い豊かな心の育成を目指していきます。